



平成十九年三月二十日
〒九三三〇八〇
高岡市問屋町四十
有限会社 沖商店発
2019.3.21

TEL 〇七六二一五二五五
FAX 〇七六二一五二五〇
E-mail info@oki-shouten.com

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょう』という二つを皆様と一緒に考え、意見を交換し合って、共に研鑽を深めて行きたい。そんな思いで本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無いご意見をお寄せくださいませ。

一 昭和天皇万歳

三月十日、北日本新聞朝刊四十六面に、『昭和天皇元侍従の日記見つかる。昭和天皇 戦時の心境つづる』と題して次の様な記事が載っていました。(一部省略) 太平洋戦争前の一九三九年から敗戦の年の四五年までの昭和天皇の肉声がつづられた当時の侍従の、故小倉康次・元東京都立大学法経学部長の日記が、九日までに関係先から見つかった。十日発売の月刊誌「文芸春秋・四月号」に掲載される。日記は、ノモンハン事件直前の三九年五月から四五年八月の敗戦まで、宮内省(当時)の用紙約六百枚に書かれている。

三九年七月五日、満州事変を主導した石原莞爾少将らを榮転させる人事の説明のため板垣征四郎陸相が天皇に面会の直後の様子について、「陸軍人事を持ち御前に出たる所『後始末は如何するのだ』等、大声で御独語遊ばされつつあり。人事奏上、容易に御決裁遊ばされず」との記述もあり陸軍人事への不満が吐露されている。

日中戦争への思いも「支那が案外に強く、事変の見通しは皆が誤り、特に専門の陸軍すら観測を誤れり」(四〇年十月十二日)「日本は支那を見くびりたり、早く戦争を止めて、十年ばかり国力の充実を計るのが尤も賢明」(四一年一月九日)。四一年十二月、伊勢神宮参拝のために京都に立ち寄った際には「戦争は、一旦始めれば、中々中途で押さえられるものではない。満州事変で苦い経験を得ている。(中略)戦争はどこので止めるかが大事なことだ」戦争はやるまでは慎重に、始めたら徹底してやらねばならぬ」などと戦争への率直な悩みが

語られている。

それで早速「文芸春秋」四月号を買ってきました。新聞に発表の通り、日記は、当時の侍従の故小倉康次が、ノモンハン事件直前の三九年五月から四五年八月の敗戦までの昭和天皇の身辺について書き記した物を、その記録の後ろ楯・証明になるような、いろんな人の日記や当時の新聞記事などを引合に出して紹介し、解説者の半藤一利(昭和史研究者・作家) 本人の感想や意見も含めて73頁に亘り記されています。(是非一度お読みください)。

今日、日本が中国・韓国・北朝鮮に大いに貢献しているにも拘わらず、六十余年前に間違って行った戦争の責任を問われ、今だにその罪を苛められ、負わされています。彼らの切り札は二言目には『日本民族は軍国主義民族・侵略国家』という日本人への悪いイメージの主張から始まります。

日本人の本来の心根は、建国の主と言われる『聖徳太子』の「和を以て尊しとすべし」の言に象徴されるように、元々戦いを好みません。そんなことは日本をよく知っている外国人の人々によく理解している、彼らも現在の日本人が六十余年前は、当時間違った指導者によって導かれた事実だと認識しているのですが、隣国の彼らは自国の利のために、敢えて日本人を悪人に仕立てているのです。(これは何度も申し上げますが、完膚なきまで敗れた日本が、米国の援助もあり、驚異的な経済復興を果たしたことに對する、隣国としての妬み・やっかみに外なりません)これは仕方ないことかもしれません。

そんな中において今回見つけた元侍従・小倉康次の日記は、昭和天皇の本来の心情(戦争回避)が赤裸々につづられていて、今日の日本民族への誤った判断を正すための貴重な資料だと思います。

私は昭和天皇に對し改めて敬意を表すとともに、これは「今日の拙い日本外交の一助にもなれば」と、死してまだ日本国民を思い遣る昭和天皇のお恵み深い御遺志の力だ」と私には思えてなりません。

中国・韓国・北朝鮮の反日派は、これも、日本国の捏造だと言いかねませんが、そんなことには頓着なく、この貴重な記録を世界に示し、日本人の本当の姿、太平洋戦争を引き起こした張本人と目されていた昭和天皇の本当の心を、全世界に知らしめなければならぬと思います。

話はちよつと横へ逸れますが、今、北朝鮮の核廃絶に関する六カ国協議云に關して、日本としては「北朝

鮮の日本人拉致問題の解決なくして日朝正常交渉なしとする外交姿勢ですが、私は間違っていないと思います。ところが、折りあたかも米国の下院で、日系の一議員が、北朝鮮の従軍慰安婦問題を取り上げてその採択を上申し、これが採択されれば「人道的立場から見てもどっちもどっち、相手互いじゃないか」と言う空気がなり、日本の「日本人拉致問題解決への勢い」を削がれかねないことになるかも憂われます。ですから日本も、触れられたくない古傷かもしれませんが、これを機会に、自国民の見解を止め、旧日本軍従軍慰安婦問題を徹底的に検証すべきだと思います(但し元慰安婦の誇大表現に惑わされてはなりません)。さらに、先日、中国で旧日本軍の毒ガスが発掘され、その際の被害への弁償問題が取り沙汰されていました。

これらのことも含めて、今次大戦に對して、衆目(全世界)の認める総合的な戦後処理をしておかないと、今後の日本の外交は何時まで経っても彼らの「たかり精神」の処理に翻弄され、受身にならざるを得ません!!これは今日までその処理を先送りしてきた歴代首相及び外務省職員の怠慢と言つべきでしょう。

話を元へ戻して重ねて申しますが、この度新たに見つかった元侍従の日記は、当時の日本を代表する天皇陛下をはじめ、日本人の性格・ものの考え方(嫌戦好和)を世界に紹介する格好の資料であり、日本国民はこれを良い機会ととらえ、昭和天皇の御心を全世界に広宣流布し、日本人への卑しい「たかり精神」に毅然と立ち向かう強い態度で、交渉して行かなければならないと思います。

二 官僚政治の粛清改革について
三月十五日、北日本新聞朝刊八面に「天下り調査」6省庁「渡り」あつせん」と題して次の様な記事が載っていました。

渡辺喜美行政改革担当相が国家公務員の天下りの実態調査のため行った十省庁の官房長らに對するヒアリングで、国土交通省など六省庁が、いったん公益法人などに天下ったOBをさらに別の法人に再々就職する「渡り」についてもあつせんしていると認めていたことが十四日、分かった。

「渡り」は法人間で移動するたびに高額の退職金を受け取るため、特に批判が強い。早い時期に「肩たたき」を受けた官僚でも、省内で出世した同期と生涯獲得賃金に差がつかないようにする狙いがあると見られ、退職時の天下りあつせんに比べ、より押し付け的な色合いが濃い。省庁側がこうしたあつせんの事実を認めた

のは初めて。

渡辺行政相はこの慣行を「スーパー護送船団だ」として強く批判しており、天下りあつせんに全面禁止することでも「渡り」を根絶する考えだ。

ヒアリングは「一月末から約一週間実施」「渡り」あつせんについて農林水産、経済産業、国土交通の三省は「毎年、二桁(の件数)は行っている」と認めた。財務、厚生労働両省と警察庁は「ほとんどない」とし、一部行っていることを認めた。

文部科学省など残る四省は「渡り」は否定したが、退職時の天下りあつせんについては「人事の一環として必要だ」などと主張したという。

この様に、今、日本では渡辺喜美行政改革担当相が中心になって、各省の天下りを必死に止めさせようとしています。これに對して各省の役人(官僚)が大反発をするのは理解できます。理解できないのは、そんな官僚の味方になって、同情したり弁護したりしている関係・国会議員連中です。二言目には「国民のため」といいながら、「国民のため」にならない天下りを弁護・容認したり、「段階を踏んで」などと常識人ぶって言っているのには呆れ果てます。

行政の実権を握っている官僚と、それに媚諂う政治家達の政官癒着の悪習を正さんと、今日までも心ある政治家が戦つて来ましたが、しかし、多勢に無勢、官僚に味方する政治家(似非政治家・金儲け主義の政治屋)と官僚の共同戦線の前に彼らは見事に叩きのめされ、或るは政治から離れさせられ、或るは彼らに併合・飼ひ慣らされ、今日に至っています。

「弱者の味方」と豪語しているメディアも、最後は自分だけ可愛さの情けない妥協に終始しています。目覚めましょう。官僚天国の今日の日本の悪体制を、国民主体の理想の体制にするように努力しましょう。

今こそ、官僚に好いように利用されて、天下りを弁護・容認する「国民のためにならない政治家」を篩落とし、真に国民のためになることを推し進めてくれる人を選び応援しましょう。

天下りあつせんの全面禁止は、一部の受益者を除く大部分の国民の願いであります。周りの汚い仲間には負けないで、妥協しないで、最後までやり抜いて頂きたい。

頑張れ、渡辺喜美行政改革担当大臣。

有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘

個人メール Email 062525@oki-shouten.com
(にこにこ通信)の意見はあく個人的な連絡です。(お問い合わせ)